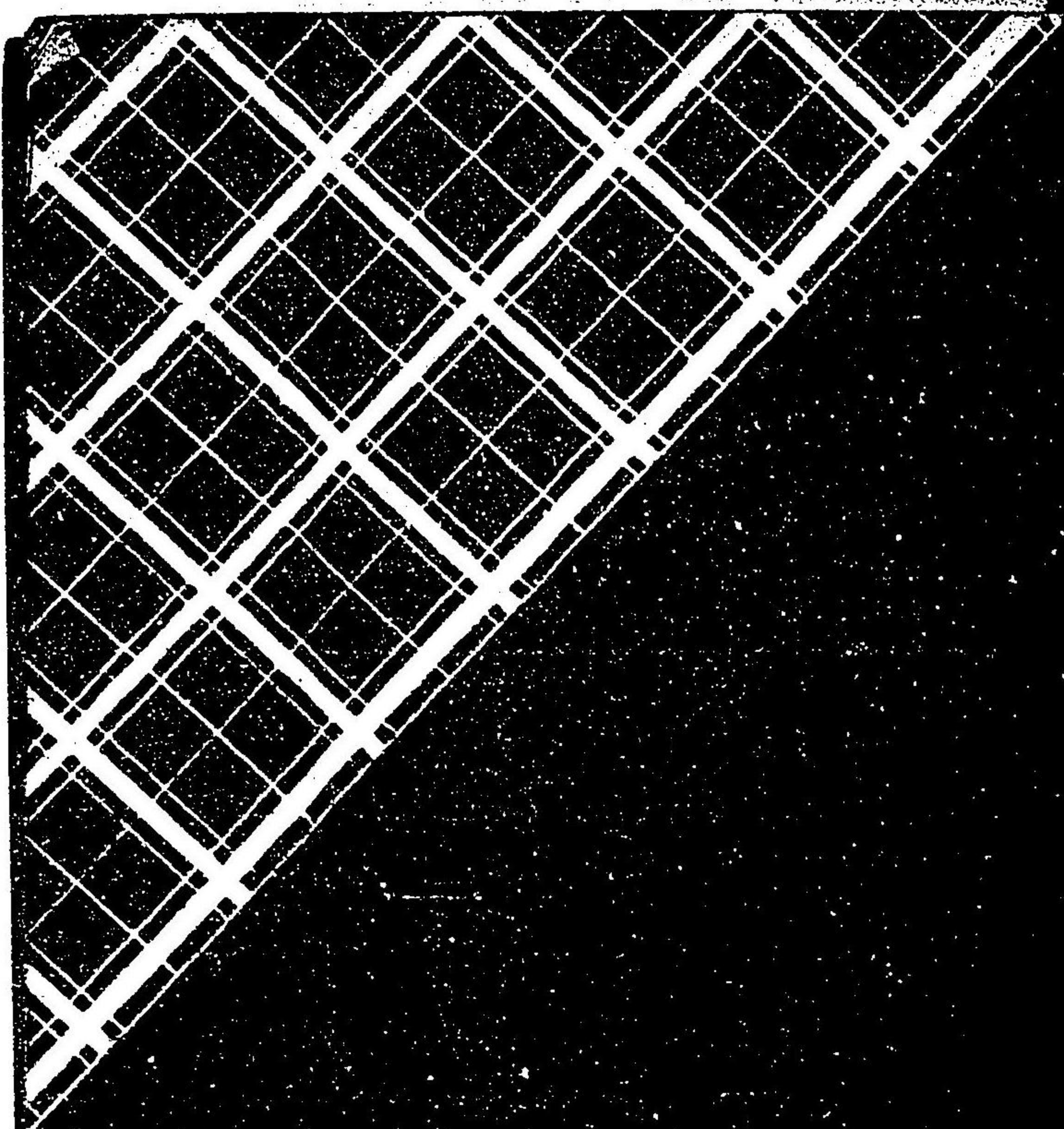
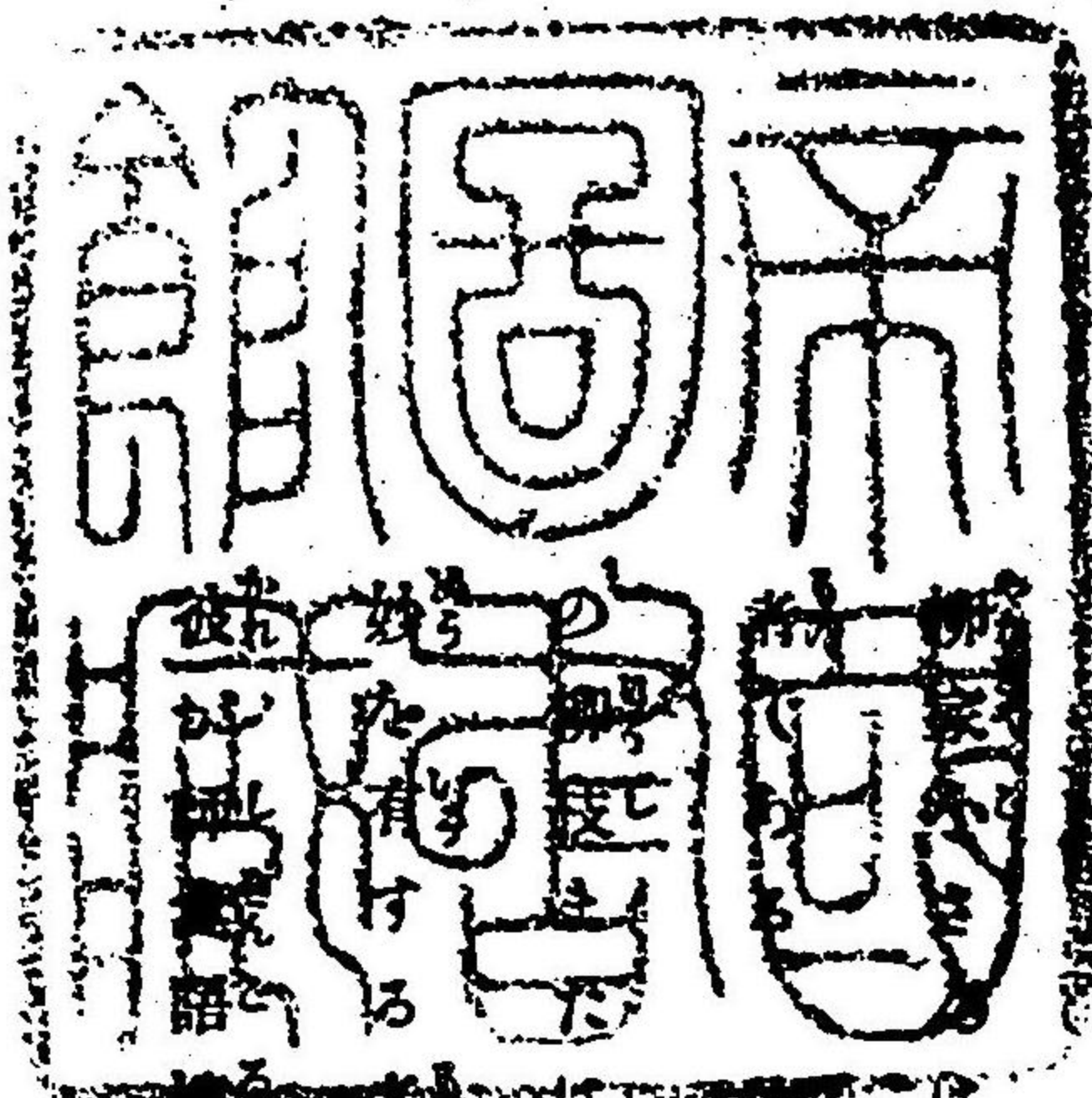






特30
397



は、現時柳派に於ける大立
他に老熟の左楽あり、若手
は、燕枝あれど、一種特徴の
者、小さん其人である、
小さんの快辨に及ばされ





柳家小さん

よくその跡を繼いで、三代目の小さんの小さんたるに育かざるものと謂ふべきである、

柳亭策胸殿

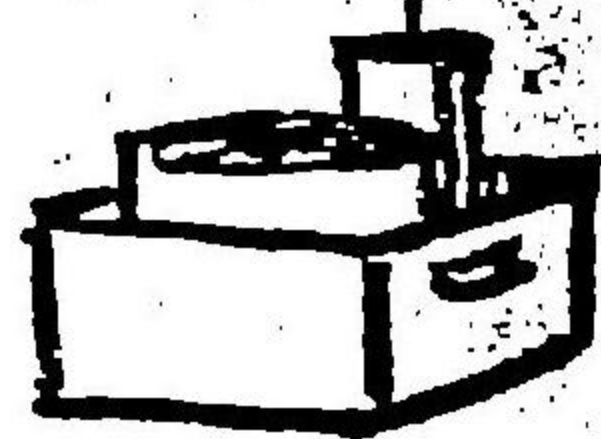


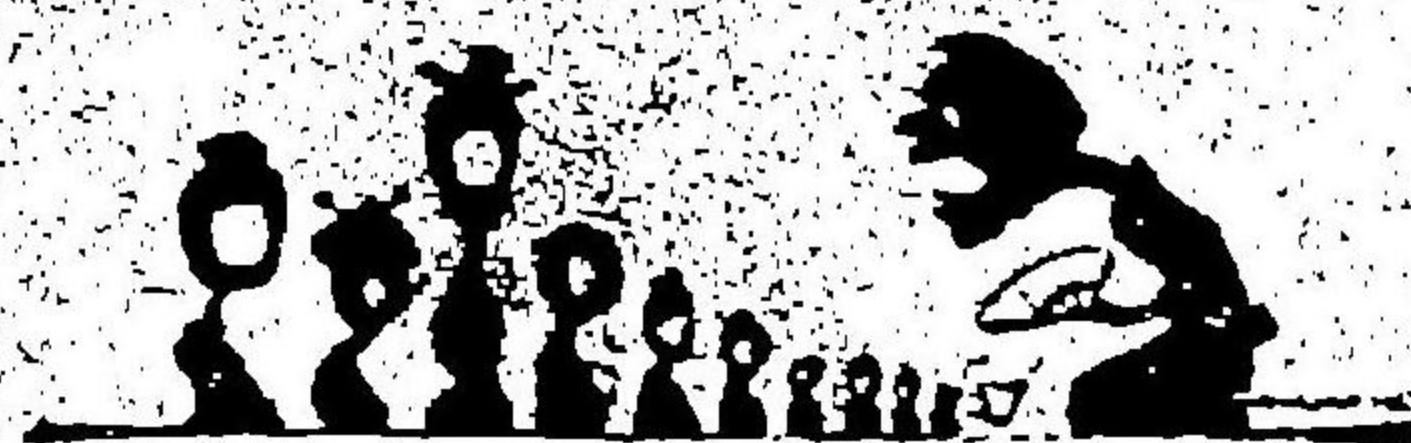
何分^{いかに}も落語^{らくご}と云^いふものはモ一澤山^{たけさん}に出^でまして是^これを遣^やらうと思^{おも}ひま
しても是^これは誰^{たれ}々が違^{ちが}つた云^いふやうな事^{こと}に成^なて居^ゐりまして話^{はな}しの数^{かず}も御^ご

席

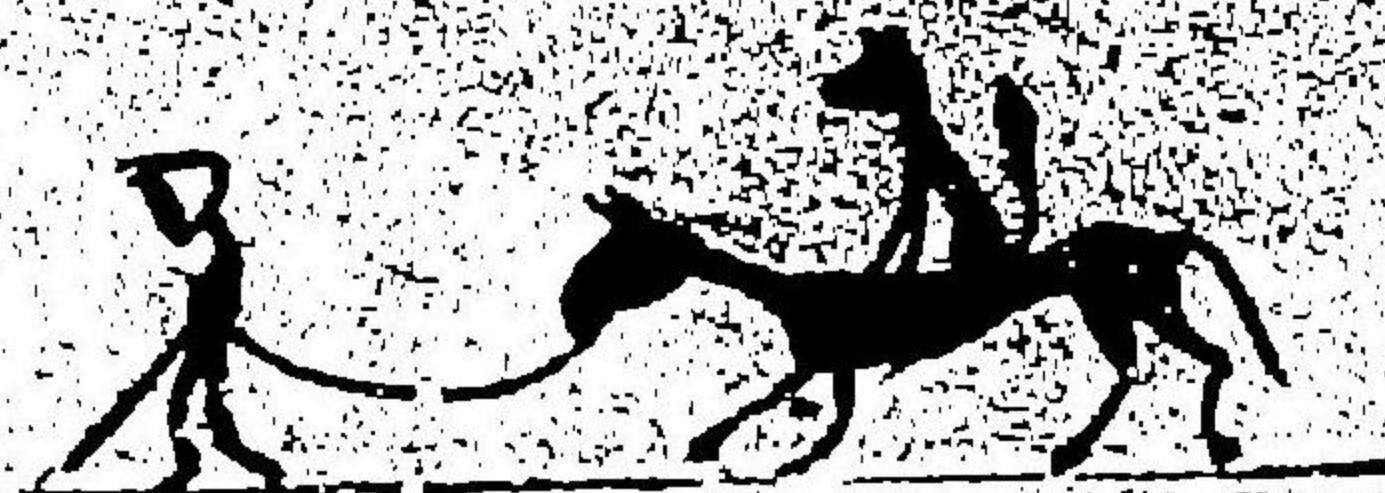
屋

柳家小さん口演





坐いません今回は粗忽長屋と云ふ御話してござい升が代々粗々ツかしい奴計り長屋へ然う集まろう道理も御坐いませんが其處が話して尤も昔しから粗忽な奴と云ふ物は無いでは御座いません是りやア性質で致し方が無い者で普通教育を受けた奴或は身分のある子息杯に御座りまする物で釋迦の弟子で范獨と云ふ人は我が名前を忘れたと云ふ鹿々かしい男で手前共落語仲間にも鹿々々敷奴が澤山に御座いますが豈夫に我名前を忘するゝと云ふ程鹿々々敷者はありません其范獨は我名を忘るゝ程の奴だから定めし無教育な下等な奴の子息かと思ふと御案内の如く立派な武士の子息でありながら全く只今の事を直ぐに忘れると云ふ事は只今以て人が存じて居ります右の范



獨が昔し馬上で便ひに参りました只ある山中に掛りますると頻りに大便が通じ度成りました尤も大小便は身に徹へるから何んな鹿々々敷い奴でも分らない事はありません尤も分らんで誠に不都合千萬でございます山中の事で別段に雪隠の設も御座いません所から馬からヒラリと飛下りまして流石に逃られては悪いと思つたか馬の手綱を立木に縛り魔除けになると云ふ處から襟にさしたる矢を二三本取り出して馬の背中へ立て尾漏な話しでげすが其所で大便も充分に通じました山の事で地下に遣りましたが何分にも大便の通じが長かつた事と見えて前の事を忘れて仕舞たと云ふ随分鹿々々敷人もあるもんで 范獨「ヤ宜い馬だな大層な馬だ……立木に縛つてあ



るが誰れも此回到に主は居ないか此處に馬があるが……拙者は大分草臥れて居る様な心持がするから後に家來に持して遣すから少し貸してくれんか山の道は馬に限ると云ふから此馬を借りて參れば早く歸宅が出来る……ア——是に矢が指つて居る流れ矢とでも云ふ奴かア——山は怖い——此んな矢にでも當れば此れを犬死といふイヤ然し矢羽は魔を除けると云ふからこの矢を指して乗つて往けば何より仕合せでは此馬を借りて參るぞ……ア——汚ない……誰れだ此んな事を……直に忘れちまう随分甚敷人が御身分のある方々にある是れは下等な奴計りがお長屋に集る龜々々敷同志の御話で尤も何んで然う寄り有つたらうと段々尋ねますと満足な人は到底も居



堪れませんか何んで居堪れんかと云ふと通普の人が獨身者で越して參つて悉皆片付け悠くり湯にでも往つて來て一盃遣うと酒を燗をする計りにしてお湯に參つて歸つて參りますと自分の内に一人酔拂ひがブ——を言つて居る段々聞いて見ると一軒置た隣の者が間違いて這入て參り買つて置いた酒を呑まれて仕舞ふ様な譯で満足な人には住居ません龜々々敷奴が越して來ると其んな龜相があつても乃公も随分此んな事を遣り兼ね無い方だと互に勘辨をするから數年の間に不殘龜々々敷者のみが集つて參りました様な譯で甲「ア——冗談ぢやアねへせ宜い加減にしねい詰らねい……乙「何が詰らねえんだ 甲「止しねえ馬鹿々々敷やな後生だから止してくんねへ



……乙「何が馬鹿氣て居るんだい 甲「何が馬鹿氣て居つたつてお前今夫婦喧嘩を爲たらう 乙「何を…… 甲「夫婦喧嘩ア爲たらう 乙「夫婦喧嘩と云ふのは女房が有つて夫婦喧嘩だ 甲「下らねい事を云ひなさんなよ 乙「何が下らねへんだ女房があればこそ夫婦喧嘩だ女房も何も有りやアしねい獨身者だよ 甲「へい……ちやア兄弟喧嘩ア爲たらう 乙「夫婦喧嘩にも兄弟喧嘩にも獨身者だよ 甲「でも何かと喧嘩ア爲たらう……乙「喧嘩アするにも爲ねへにも誰も此處へ來た者はねへ何アに今横丁の犬が下流しを奇麗に掃除を爲た處へ泥足で這入て來やアがつたから這入つて來ちやア不可ない此阿魔ア出て往ないと叩つ挫くと云つた 甲「夫れ見ね



へなごう爲たつて夫婦喧嘩ちやアねへか……無闇に犬など打ちなさんな打ちどころがわるいと一ツで死んぢまはアな 乙「死んで呉れりヤア儲かるちやアねへか 甲「何を…… 乙「死ねば儲かるよ 甲「何せ……乙「熊の膽が取れらーあな 甲「馬鹿な事を云ふない犬から熊の膽が取れるか夫れはア鹿だアナ 乙「鹿ちやアない馬だ此通り總て間違つて居ります此長屋に熊五郎に八五郎と云ふ者が隣合つて居りまして双方も同じ様な人物で御座いましたが先づ此長屋で番付が出来ましたら乃公が大關に爲るだらう何に乃公が大關だと位置を争ふ様な人物で熊五郎の方は極不性で兎々々敷能く性質にある者で八五郎の方はチヨコ



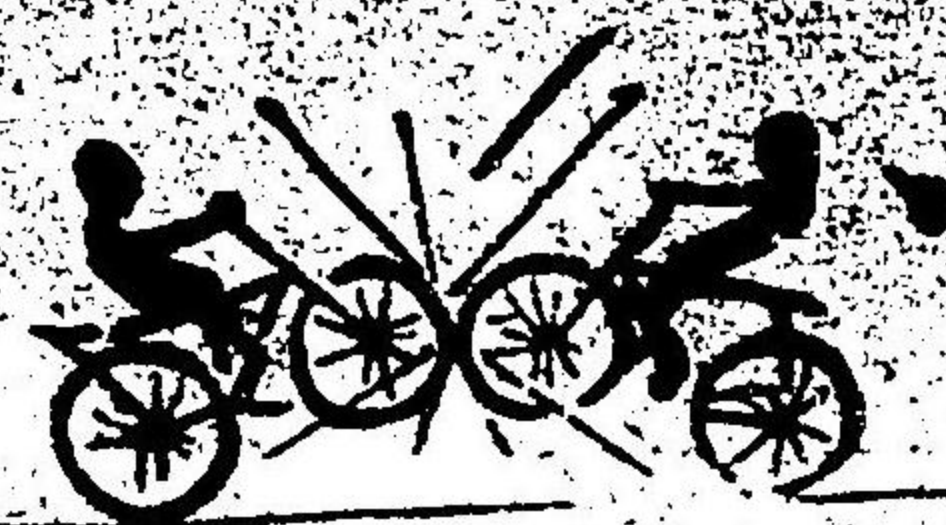
チヨコして亀々敷同じ事で此二人が誠に仲が能く兄弟の様に爲て居りま
 したが入五郎の方は忠實で朝起さると観音様へ御参詣に参ります或る朝の
 ことで相變らす八五郎御参詣をして仲見世を出まして只今とちがつてまだ
 雷門がある時分の事で廣小路迄來ると黒山の様に人が立つて居ります八
 五郎香氣な者で何んだらうと其所へ遣つて來て 八「ワイ〜〜モシ少
 し見せておくんねへ退いておくんねい 見物「サア御覽なさへ 八「御覽
 なさへつたて人間で埋つて居ちやア見られねへや退かねいか 見物「ヤイ
 此ん畜生乃公の頭を打つたな 八「笹棒め光つて映しい頭だ電氣燈頭め
 見物「電氣燈頭と云ふ頭があるかい見たければ斷つて退いて貰へ……



八「何を苦圖々々吐しやアがるんでへ 見物「ヲヤ人の股倉の中を潜つて
 往さやアがる 八「此位な勢でなけりやア前の方へ出られる譯の物ぢや
 アねへ……恐しい大勢面ア並べて居るんだなア……其處に腰を掛けて居る
 お爺さん何んだいまだ始まらねへのかい 爺「何んだお前は…… 八「何
 んだつて往來で大勢人を寄せて居れば何にか爲るんだらう御休みかい……
 爺「御休みと云ふのは笑しいなお前人を押し分けて前へ飛出してキヨロキ
 ヨロして居るが別段に見せる見世物じやアない 八「ちやア見ちやア不可
 ねへのかい 爺「何に夫りや大勢が見てくれる方が宜い 八「何程だい
 爺「幾程も何も有りアしない昨夜此處に一人行倒れが有つた 八「エー……



…行倒れが 爺「ア、昨夜中に倒れたらしい其所に菰が掛つて居るから私共が許すから能く御覽」 八「へーと菰を捲ると頭ア出して居りますから」 八「人間下すねへ」 爺「人間さ昨夜明方に死んだんだね」 八「悠氣な奴があるもんだね……ライ、皆なが見て居るせ見つ共ねへちやア無へか……」 爺「揺つて起したつて死んでるんだよ」 八「エ、……」 爺「死んでるんだヨ……」 八「呆れ返つたもんだね何んだつて如斯處で死んだんだろう……」 爺「何んで死んだか分りやア爲ない……引取人が無い爲に心配を爲て居るんだ」 八「エー」 爺「町處とか亦是職業とか何か、知れなければ困る勿論職人には違ひ無いやうだが家主の名前でも知れるといゝが何にも分らん



其處で多くの人が見て呉れる方が好い和郎さんも御職人のやうだが職人は交際の弘いもの此人は何の邊で逢たとか何處で見たとかあるまいものでも無い能く見て遣つて下さい」 八「呆れ返つたもんだね悠氣な奴だな……」 八「お前何處だい」 爺「可笑な人だな死んでるんだヨ」 八「ア、死んでるんだつて……お前さん行倒れたつて死んでるちやア無いか」 爺「行倒れて死んだんだヨ」 八「夫ちやア死倒れた」 爺「マア行倒れて死倒れたやうなものさ」 八「ヤレ……」 葬送は何日なんで…… 爺「可笑な人だな引取が無くつて心配を爲て居るんだな葬送處の騒ぎちやア無へ早く見て御呉んなさい」 八「見なけりやア不可ねへかい」 爺「成丈け多くの人が見て呉



れなけりやア不可ない早く知れ、ばわたしどもの幸福當人の幸福能く捲つて見て御呉なさい 八「ヲヤ」菰が掛つて居やアがる（捲つて見て）矢張極りが悪いと見えて横を向て死んでやアがらア 爺「死ぬのに極りが悪いと云ふ道理も無いが……手を付けちやア不可ないが能く見て遣つてお呉れ…… 八「恐ろしい細長へ顔で……此ん畜生オイ熊公ヲイ熊ア……圖太敷い奴だな 爺「此者の名を熊公と呼つしやるからには御存知の御方と見えるね 八「御存知處かい乃公ん處の隣に居る小哥と兄弟同様に爲て居る片腕とも思つて居る熊でんでエー…… 爺「ヲヤ」夫は御氣の毒の理由……然しつながら縁か和郎さんが見付ると云ふのは實に不思議……マ、當



人も幸福なら私も厄免れ當人も實に結構だ…… 八「何にが死んで結構だ…… 爺「マ、怒つちやア不可ない……御親類でも有りますか 八「身親類兄弟杯は有りやア爲ねへ獨身者だから乃公と兄弟同様に爲て居るんだ 爺「ハ、ア兄弟も親類も無いと云つて見ると先づ引取方の處は何うも仕方が無い和郎さんより外には無いね 八「然う云ふけれどもマア聞なせへヨ此死人を預つて居るのは和郎さんの役だらう其預かつて居る人が無暗に何處の馬の骨だか知れねへ小哥に渡す譯には行きますめへ 爺「夫りやア無暗に渡す譯には不可ないが…… 八「夫れ見ねへ渡す譯には行くめへ…… 爺「夫りや次第に由れば渡さない限りは無いが所は何處だい 八「何處も



此處もあるもんか……爺「宿の無い者は無いが何處だか云ひ被爲な……」
 八「然んな事は何うでも好いヨ……お前さん引取々々と云ふが引取るにも
 何にも未だ當人が此處で死んでる事を知らねへ野郎なんで……爺「何だ
 い當人と云ふのは……」八「此死人が當人ヨ……今朝ね小哥が觀音様へ行
 けと誘つたら何うも心持が悪くつて不可ねへなんてね……奴は此處で死ん
 でののを忘れてるんだ爺「聞けば兄弟同様の人だと云ふこと其兄弟同様
 の人が淺間敷い最期を遂たんでお前かツと取逆せたね能く氣を沈着て決て
 クヨ／＼爲ちやア不可ない……」八「笹棒奴然んな氣の狭んちやア無へや
 何爲る當人が雛形でゲスから此處へ連れて來やせう其處で見較べて見て違



へが無きやア小哥が引取ると斯う云つたやうな勘定で今見本を連れて來ま
 す……爺「人間に雛形だの見本だのと云ふ物があるものか能く沈着んと
 不可ない八「今其當人を引張て來ますからお爺さん世話ア爲序でにモー
 少し番を爲て居て御吳んなさい一ツ走り往て來るから左様……」
 爺「ツイ／＼往て仕舞つちやア不可ないヨ……ア、往らまやアがつた
 ……乙「何んです那れは……」爺「狂人だね乙「エ、……」爺「狂人
 だヨ乙「狂人だつて人間に雛形てへ物があるもんちやア無へ見本を連れ
 て來るつて居やアがる狂人と云ふものは始末の悪いもんだね
 と皆笑つて居ります此方は八五郎一生懸命に歸つて來て



八「ヤイ／＼／＼ヤア……熊公 熊「叩かない其處は明店だ乃公處は明て
らア 八「ヲ、然うか……熊公「ヤイ／＼熊公…… 熊「エ、騒々敷い
な……ヲイ／＼草履を穿たなり上つて來て座つちやア仕様が無へなア……
八「氣樂な事を云つて居やアがる……熊ア 熊「何だ 八「エ、……
熊「何だヨ 八「何だも無へものだ眞實に…… 熊「何うした 八「今淺
草の金比羅様ぢやア……無へ……明神……水天宮様へお參詣に往た……
熊「淺草に水天宮様があるものけへ 八「ウンニヤ……豐川様……
熊「觀音様だらう 八「ウム觀音様へ參詣に往たんだ 熊「何う爲たい今
日等ア人が出たらう 八「大勢出やアがつて面白かつた…… 熊「公園の



玉乗は景氣が好いだらう 八「氣樂な事を云ふない 熊「何だか……
八「何だか分らなく成てしまつた 熊「早く云いねへな 八「待ねへよ……
……乃公が御詣を爲て仲見世を出ると大勢黒山の様に人が集つてゐるんだ……
熊「見世物か…… 八「何だか知らねへが面白からうと思つて中へ這入つ
たんだ 熊「何うしたい 八「這入て見ると……待て呉れ這入つたんぢや
ア無へ人を押分けて見ると驚いた 熊「何う爲たい 八「ソノな……死倒
れ……行倒れ……死んで倒れて行倒れたつて…… 熊「何だい 八「エ、
…… 熊「何んだい…… 八「菰が掛つて居る爺いが見て呉れ／＼と云ふ
んで夫れでマア菰を倦つて見たんだ菰を倦つて……(泣聲)「ヤイ／＼何うも

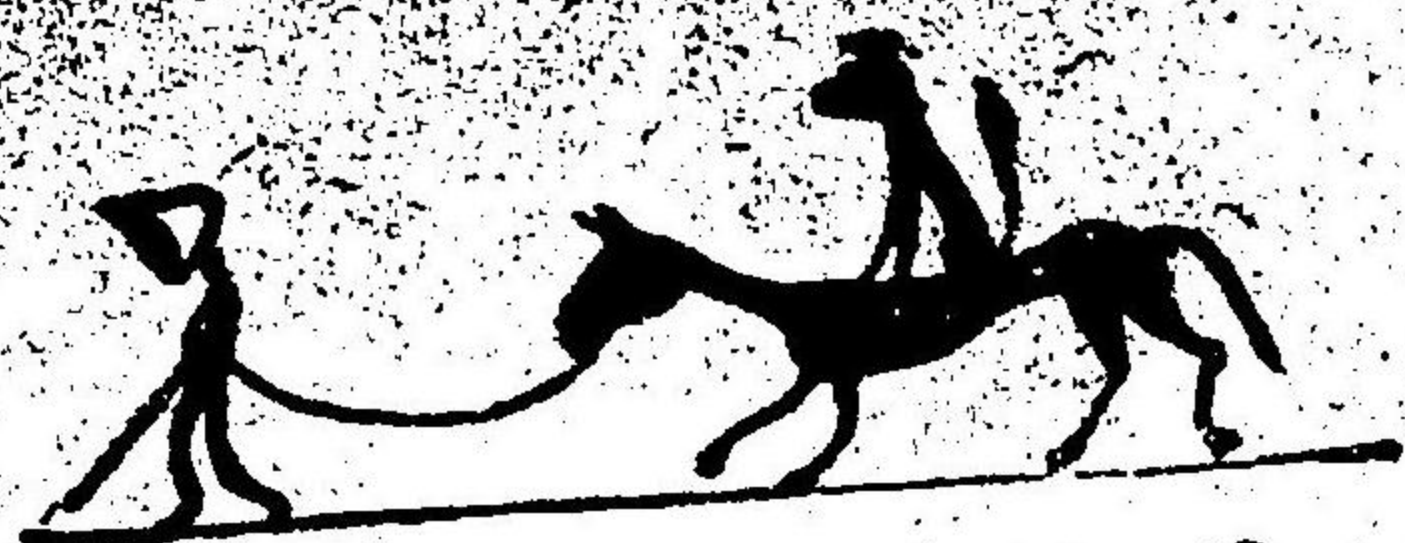


詮方が無いせ…… 熊「何んだ 八「何だつて……何うも是迄と諦めるな
ら詮方が無へ…… 熊「何だか少とも分らない何だ 八「能くく面ア見
ると汝が其處に死んでるんだ驚くぢやア無へか 熊「ヲイく冗談云つち
やア不可ねへせ未だ起た計りで乃公は死んだやうな心持は爲ねへ 八「爲
ねへたつて始めてだから分らねんだ二度目からは分る 熊「産を爲るやう
だなア……だが全く死んだ様な心持が爲ねへせ 八「無益ねへ強情を張る
な…… 熊「白痴ア云へ

第二席



八「アレ未だ強情を張て居やアがる汝昨夜は宵から何時も早く寝る不性者
ぢやア無へか夫れが寝たのは彼是二時だらう 熊「ウム…… 八「ソレ見
る那處へ死に往たらう 熊「死にゆくやつがあるものか昨日は晩方から
本所の家へ遊びに往たんだ 八「親類かい…… 熊「親類ぢやア無へが知
つてゐる家へヨ其家で大變御馳走に成つちまつたんだ 八「何を御馳走に成
たんだい酒を飲んだのだな 熊「ウム…… 八「夫れから何う爲た……
熊「ホロ酔機嫌で家へ歸れば能かつたが途北廓へ素見に往た 八「遊んだ
のかい 熊「中ビケ過まで那方此方をグルく廻り酔が醒て薄ら寒く成た
から詰らねへと里心が付て遊ばずに歸つて來た 八「家へ歸つて來たのか



い……熊「ナニ田町で鳥渡した處で五合斗り飲んぢまつた 八「夫れから何う爲たい 熊「好い心持に成て其れからブラ／＼何んでも觀音様ア抜けたやうな心持で何んだかコー仲見世の處を通つたやうな心持もするけれども明瞭知れねへ…… 八「ソレ見ろ……夜明しかなんかで詰らねへ物を喰たり飲んだり爲て遣られちまつたんだ虫の息で仲見世迄あるいて來やアがつて堪らなくなつて那處で打倒れちまつたんだらう 熊「何んだか今朝は心持が悪い 八「悪い筈だアな死んでるんだもの兎に角お前も一緒に往て此人が雛形でござい升と見較べなけりやア先方で渡しやア爲ねへ一緒に行きねへ 熊「往なくつても宜さうなものだなア 八「雛形だから行な



きやア不可ねへやな 熊「極りが悪いなア 八「手前の死骸を手前で引取りに行くのに極りが悪い事は無へや一緒に往てヨ誠に濟みませんが云ふやうな事を云て万更死んだつて然う變りやア爲ねへから面を見較べて間違へ無けりやアお前に渡すやうなものだ誠に相濟みませんが平生粗々かしい人間でございまして此處へ死骸を忘れて参りましたと云ふんだ 熊「妙だなア 八「行かなくつちやア不可ねへ 熊「然う云へば餘ッ程嫌な心持だ何んだか變な心持に成て來た 八「然んな事をグズ／＼云つて遅く成ちやア耻の上塗りだ一刻も早くゆかなくつちやいけねへ 熊「マア待ねへヨ 八「待ねへも何も無へや早く往なくつちやア不可ねへサア行／＼



どん／＼遣つて来ました 八「此處だ／＼……皆退てお呉んなせへヲイ退
 きねへ／＼ 熊「此處は書双紙屋だせ 八「エ、養生買ひも爲ねへで大勢
 立て居やアがるなア立て見て居る位へなら買へ 見物「大さにお世話だア
 ナ 八「何處だか分らなく成て仕舞つた 熊「分らねへたつてお前見て來
 たんだらう 八「見て來たのヨ……ヲ、此處だ／＼……ヲイ退てお呉んな
 せへ／＼發頭人だ熊ア威張て這入れ……誠に濟ません斯んな遅く成るんち
 やア無へんですが大變に遅く成た 見物「遣つて來た／＼ 爺「ヲ、お前
 さんだな先刻大變妙な言を云つて歸ん被爲たのはお前さんだツけな……
 八「へエ大變に遅く成りまして那れから歸りまして力を落さねへ様に當人



にも斯う／＼でマア汝が死んでると斯う云つてね能く云ひ聞しました處が
 大變に平常粗々つかしい野郎だもんですから何うも乃公は死んだやうな心
 持は爲ねへなんて始末に行けません段々云ひ聞して遣つたら夫れじや昨夜
 宵から夜露に打たれて夜明の物をへタクタ喰たから大分夫れに遣られたん
 だらうと云つてね漸く分つたと見へて往て見やうと云ふんで一刻も早くこ
 云つてね遣つて來たが未だ年が若へもんですから極りが悪いなんて……ヲ
 イ此方へ出ねへ／＼前へ出なくつちやア不可ねへ極りが悪くつたつて詮方
 が無へ見較べるんだ今の事を云はねへかい 熊「何うも誠に濟みません平
 常粗相ツかしい人間でございまして此處ん處へ死骸を忘れて行くやうな勘



定でございまして 爺「アイ／＼冗談云つちやア不可ない氣味が悪いなア
 一人ならず二人迄然んな白痴な事を云つて來ちやア困る詰らん事を云はな
 いで其處に菰が掛つて居るから夫れを倦つて……本人と云ふ人夫れを能く
 御覽…… 熊「へエー 八「へエツたつて和郎見ねへ 熊「エー 八「見
 るんだヨ見ろ…… 熊「見るんだがな兄イタイ一層（泣聲）……見ねへ方が
 歸めが好いから…… 八「何を云つて居やアがるんで、早く見ろてへ事ヨ
 熊「エ、 八「エ、ちやア無へや分らねへなア間違へがあるか無へか見較
 べるんだから見なくつちやア不可ねへや 熊「然うかなア……（菰を倦り）
 フヤ／＼大變に兄イ瘦ちまつたナア 八「詮方が無へやナア 熊「長へ面



に成たなア目が窪んで頬がこけて小鼻が落て眞ッ白けに成ちまつた考へて
 見ると人間と云ふものは詰らねへもんだな斯んなに成ると知つたら昨夜避
 んちまやア能かつた 八「何を云つて居るんで汝に泣ッ面ア爲れちやア
 合ねへや御互ひに兄弟のやうに爲て汝の方でも乃公を便りに爲れば乃公も
 汝を便りに爲て居る其兄弟のやうに爲て居る汝が斯う云ふ姿に成たのを見
 て跡へ残る乃公だつて餘まり好い心持ちやア無へや……（泣聲）けれども江
 戸ッ子だ涙を溢すんなら腹ん中へ溢せ乃公はモ……因縁だと斷念て居る
 見物「ヤー二人はタイ／＼泣てるぜ 八「サア泣て居ちやア不可ねへせ宜
 く改めて見る間違ひは無へか 熊「色々御厄介様で…… 八「能く見なく



ちやア不可ない 熊「大丈夫でござい升 見物「那んな事を云つて居やア
がる 爺「アレく死骸を抱上げた……ヲイく持て往つちやア不可ない
持て往つちア不可ないヨ 熊「へエ…… 八「色々御世話様でございまし
た 爺「イヤ能く見なくつちやア不可ない 熊「へエ大丈夫でござい升……
兄イ全く乃公に違へ無へ…… 八「當然ヨ 熊「けれども抱つてゐる方は
乃公に違へ無へが抱てる乃公の方は誰でございませう

(丁)



えの字嫌ひ

エ、相變らす御笑ひの一席を申上げ升が何うも此田舎者と云ふ者は理屈も
分らず唯強情で其れが爲に御笑ひを出來すやうな事が澤山御座います

隠「權助や 權「ハア…… 隠「鳥渡此處へ來なヨ 權「ハイ……

隠「火が煙草盆に無いやうだが入れて來て呉れろ 權「和郎様分らねへ事
を云ふだね煙草盆へ火を入れたら煙草盆をこがしちまうだらう、煙草盆の
中の火入れの中の灰の上へ火を入れるだんべい 隠「口の減らねへ事を云
ふな然らなくとい事を云はなくつても煙草盆へ火を入れるのは極つて居る



明治四十一年十月一日印刷
明治四十一年十月五日發行

編輯兼發行者

神谷竹之輔

東京市芝區三田三丁目七番地

發行者

池村鶴吉

東京市淺草區福井町一丁目一番地

印刷者

天沼米三

東京市芝區櫻田太左衛門町七番地

印刷所

製英舍

東京市芝區櫻田太左衛門町七番地

發行所

東京市芝區三田三丁目七番地

三芳屋書店

銀座貯金口座壹壹壹六番

東京市淺草區福井町一丁目一番地

松陽堂書店

銀座貯金口座六一三三番

定價
金廿五錢

不許
複製

